宝箱

W校高等部二年
岩佐佳奈

「この世には莫大なお金を払ってまで大切な人の命をつなぎ留めておきたいと思う人もいる」。そんな話を聞いた時、私はとても不思議に思った。なぜ話すこともできない、食べることもできない、何も覚えていない、という状態の人を形だけでもこの世に引きとめようとするのか。それを「生きている」といえるのか。しかし、もし自分が同じ立場、例えば、もし私の家族の誰かが植物状態になって、話せない、覚えてない、目も開けない、しかし生きてはいる。そんな状態になったら、それでも私はこの世に引き止めるということを不思議に感じたか。「生」とはなんなのか。どういう状態が「死」なのか。どこまで人は「生きている」という状態なのか。

こんなことを考えている時に、私にある出来事が起こった。私の父方の祖父はここのところよく物事を忘れることが多かった。自分の息子の顔や孫の顔さえも時々忘れてしまうようだった。ある日の休日にアメリカから日本にいる祖父母にテレビ電話をした。実のところ、私はとても怖かった。何がかというと、私の大好きな祖父に忘れられていないか、ということだった。会いに行くたびに物忘れが激しくなっていく祖父を見るのが怖くて悲しかったのだ。なので、会うたびに、「じーじ、これ誰だかわかる?」と自分を指さし聞くのだ。すると祖父は「んー、佳奈ちゃん?」と答えるのだ。その答えを聞いて私はとても嬉しくて安心していた。しかしそのテレビ電話の時、祖父は実の息子とその孫を間違えたのだ。みんなはそこまで気にしていなかったが、私はとてもショックだった。祖父のその状態がショックだったのではなく、私もいつかみんなのことを忘れていくかもしれな

い、という考えに恐怖を覚えたからだ。友達、思い出、そして家族の顔さえも、いつか忘れてしまうのか。私のポリシーに、「出会った人たち全員が大切な存在になるよう努力する」というのがある。その理由の一つに、人生は沢山の人たちと出会い、色々なことを体験することによって満たされると思うからだ。そして何よりも二つ目に、人生は思い出によって作り上げられている、と私は信じているからである。極端な例だが、もし自分が突然今までの記憶―友達、家族、思い出―その全てを失ったら、何が残るのだろう。その全てを失うということは、今の自分を失うということだ。なぜなら過去の全ての思い出が今の自分を作り上げていると思うからだ。特に友達や周りの人たちとの思い出は、共有することによって自分の人生の軌跡となるのだと思う。いい例が卒業文集だ。クラスメイトと作り上げてきた楽しかった学校生活を思い出せる大切な宝物である。しかし、もし

誰もお互いのことを覚えていなかったら、それはただの無価値なものに成り果ててしまう。なので、もし友達に忘れられていると私の一部、過去を、失うような虚しさを覚える。だから記憶は生きることにおいて欠かせないものだと思う。

この考えが絶対正しいというわけではなく、私自身が自問自答を繰り返した結果だ。このような道徳的な問題には「正しい答え」はないのだ。そのことは考え始めた時から気づいていた。しかし私はこの事について考え続けた理由がある。それは、「最高な人生の終え方」を知りたかったからである。ある日突然、自分が死ぬことについて考えるという経験はあるだろうか。少なくとも私は頻繁にある。辛くて苦しくなる。だから本当に死ぬときはこんな苦しい気持ちになりたくない。そのためにはどうしたらいいのかと考え続けた。そしてその答えが、思い出一つ一つを大切にする、だった。自分が死ぬときに、例えば一番理想的な

寿命で死ぬとして、大切な人達に見守られながら死んでいくのはとても幸せだろう。しかしそれ以上に幸せなことは、その人たちとの思い出を最後の一瞬に思い出すことだ。忘れないように大切に大切に守ってきた思い出をこの世の最後に振り返れる幸せに私は魅了された。これこそが「最高な人生の終え方」だと。つまり「生」とは、少なくとも私の定義だと、過去の思い出や出来事でたくさん詰まった宝箱のようなものだ。したがって、人間が「生きている」という状態なのは、この箱のなかに次々「思い出」という名の宝物たちが入れられていっている状態だと思う。つまり死の瞬間、この箱は永遠に閉じられ、そこにはもう二度と新しい思い出は足されない。「死」とは、そのようなものではないかと私は思っている。

当たり前に感謝

W校　高等部二年　鹿内　颯太

　当たり前を大切にできる人は素晴らしいと思います。僕がそう思うようになったのは、アメリカへ引っ越しをしてからのことでした。

　僕は親の転勤で、十五年間住んでいた日本を離れて、アメリカで住むことになりました。そこで目の当たりにしたことは、文化の違いです。今まで当たり前だと思っていたことが当たり前ではなかったり、ありえないと思っていたことが当たり前だったり、たくさんの新しい発見がありました。

　電車というのは、日常生活や旅行をする時などに欠かせない、大切な交通手段です。僕は日本に住んでいた時に、よく使っていました。日本では時刻通りに来ることが当たり前です。したがって予定も立てやすくとても便利です。もし一分や二分遅れた場合はアナウンスで、

20 × 20

「すみません」と謝ります。この利用者への計らいはとても好感が持てます。しかし、アメリカでは違います。遅れるのは当たり前です。時刻通りに来たら、ラッキーだと僕はいつも思っています。日本では、時刻通りに来ることが当たり前でしたが、アメリカの実態を知ると日本の現状の良さに感謝しなきゃいけないと痛感させられます。

食事というのは、人間にとって生きるために絶対に必要なものです。日本では、「食事を作ってくれる様々な人に感謝して、完食しよう」と教わりました。日本で、レストランへ食事に行くと、残している人はほとんど見かけません。しかし、アメリカでは違います。残すことは当たり前です。自分の嫌いなものはゴミ箱へ捨てます。アメリカではレストランでも食事を残して帰ります。彼らは食事ができることは当たり前だと思っているためそういった行動が出来るのだと僕は思いま

す。先日、僕が通う現地校で、自分の母国の文化を紹介するという授業がありました。そこで僕は、日本の食事マナーの代名詞である「いただきます」を紹介しました。「食事の前に手を合わせて、食材や食事に携わった人への感謝を表す言葉」と説明しました。すると、この日本の文化を知らなかった人達は、とても驚いていました。日本では当たり前の一言が、他国の人からすれば、素晴らしい文化なのです。

　このように、当たり前のありがたさに気付くことは、とても重要です。なぜなら、気付かずにいると、相手や物を敬う気持ちが薄れていくからです。人間は慣れる生き物です。「こうで当然」「やってもらって当然」そんな風に考えてしまうからです。身近な物だからこそ、当たり前になってしまい、感謝の気持ちを忘れてしまいます。

　友達。これはどうでしょうか。毎日のように学校で会って話したり、メールで連絡し

たり、とても大切な存在です。しかし、だんだんとそれが当たり前になっていき、一緒にいられる喜びを忘れてしまいます。僕がアメリカへ引っ越しをして一番苦しかったことは、今まで当たり前のように、毎日会っていた人達と会えなくなったことでした。失ってから気付く大切さでした。あの時、なぜ「ありがとう」という簡単な言葉を言えなかったのだろうか。あの時、なぜ遊ぼうって言われていたのに断ったのだろうか。そういう思いが、僕の中でこみ上げてきました。友達と一緒にいることの出来る日々は当たり前なのかもしれません。しかし、いつ別れが来るかわかりません。僕は友達と離れ離れになったあの時、友達といられることの当たり前に、感謝しなければいけないと強く感じました。

「明日やろうは馬鹿野郎」これはフジテレビで放送された、プロポーズ大作戦というドラマでの主人公のセリフです。「伝えられる時に伝えなければいけない。」そういう意

味が込められています。僕はこのセリフが大好きです。当たり前の事を失う時が来るかもしれません。それが明日なのかもしれません。だからこそ、伝えられる時に伝えなきゃいけない。感謝しなければいけない。当たり前だからいいや、という気持ちは絶対にだめだと、この言葉から感じました。

これからの人生、たくさんの当たり前に出会うことになると思います。僕はそういった場面で、感謝の気持ちを忘れないようにしよと思います。物を大切にする気持ちや人に対する謙虚さ、当たり前に感謝することは、生きる喜びを生むのだと僕は考えています。

20 × 20

本はどこでもドア

W校高等部一年
押川　春香

日本でも香港でも、ニューヨークでも、電車やバスに乗れば目の前に携帯電話を片手に座っている人を必ず見ることになる。座っている人だけに限らず、立っている人も、そして道を歩いている町の人たちもみんなこぞって下を向き、携帯電話の画面を眺めている。ここ数十年の間、携帯電話だけに限らず、テレビやインターネットなどのテクノロジーが発達し、これらのものは私たちの生活になくてはならない、欠かせないものと化している。それにともない、人々の急速な活字離れ、読書離れが進んでいる。日々の生活に追われる現代人はとにかく時間がなく、こういった技術は少しでも時間を節約し、人々のストレスを発散するのに一役買っているからだ。勉強に忙しい学生や、仕事に忙しい社会人の中に、

果たして月に本を二冊以上読んでいる人はどれくらいいるのだろうか？

現代の人々、都会に暮らす人々は本当に忙しい。時間に追われ、ストレスを溜めてしまうそんな人たちの前に、インターネットなどの素晴らしい技術が、ちょうど私たちが生まれた頃から急速に発達し始めた。人々はテレビやゲームに娯楽を求め、満足感のような物を得て、その需要は止まることを知らない。しかし、本当に技術に頼り切ったままでいいのか、ということを考える人はほとんどいない。これらの技術に押され、本が親しまれにくくなっている、ということに触れる人も少ない。私自身も、小学生の頃は本が大好きだった。おそらく月に十冊位は読んでいたような気がするし、常に読みたいと思っていた。もちろん今でも本は好きだ。しかし考えてみると、携帯電話やパソコンを見ている時間が増え、本と向き合う時間は確実に減っている。本だけではなく、一般的に活字離れが進んで

いる様な気がする。新聞を読まなくてもテレビを見ればニュースが手に入るし、インターネットでは新聞のような堅苦しい言葉は使わずに簡潔に事柄が整理されている。人々は一度新しい技術の世界に足を踏み入れると、はまり込んで行くことは意識しなくても可能だ。しかし、抜け出すことは中々簡単なことではない。

そんな生活の中で、忙しさの中に埋もれている人々は、本の魅力を忘れてしまっているような気がする。例えば、本の特徴は自分自身が働いて情報を集めなければいけない点だ。テレビドラマであれば、音声が勝手に情報を発信してくれるし、画面を何もせずに眺めていても、何が起きているのかを把握することも可能だ。しかしこの点、本は自分が動かなければ何も始まらない。まず、目を使って情報を読み取り、次に、頭を動かしてその意味を解釈しなければいけない。前後の文章とのつながりや、物語なら登場人物の心情、随筆

などならば筆者の意見、と読んでいる間に考える必要がある。本を読んでいる間、実は人はとても忙しいのだ。そして、自分で取捨選択した情報は頭に根強く残り、忘れられにくい。苦労して集めた分だけ、長く頭の中に残るような気が私はする。そして何より、最大の魅力は、本はどこにでも人を連れて行くことができる点にあると私は思う。例えば、まだ行ったことのない国にだって、過ぎてしまった遠い昔にだって行くことができるのだ。言うならば、本は「どこでもドア」であり「タイムマシン」なのだ。自分自身の頭で色々なことを理解するため、大きな感動が生まれることもあるし、深い悲しみが生まれることもある。このように、本にはたくさんの顔がある。

現代社会ではテクノロジーが急速に発達し、それらがない生活はもう今では考えられないほどになっている。もちろん、携帯電話やインターネットにもたくさんの利点がある。し

かし、少し視点を変えて読書を生活の一部にし、親しんでみてはどうだろう。自分にとっての素敵な一冊が見つかるかもしれない。



高校

LI校中等部一年　ホースリーるな

今年、私はアメリカの現地校で八年生になりました。日本の学校ではまだ中学一年生です。それなのに、今年の一二月までに自分が行きたい高校を探さなくてはなりません。そのために両親と一緒に自分にあった学校を去年の冬ごろからリサーチし始めました。

ニューヨークにはいろいろな分野の高校があります。私の住んでいるブルックリンだけではなく、マンハッタン、クイーンズ、ブロンクス、そしてスタッテンアイランドと通える範囲も広まっています。それらは全部で二千百六十七校もあります。その中から行きたい学校を選べと言われても、とても難しいです。例えば、スペシャライズハイスクールは独自のテストを受け、その成績順に希望する高校に選ばれます。一つ一つの高校で入試の方法も違うのでそれを理解するのにも時間

がかりました。私は数学や理科に興味があるのでその教科に力を入れている学校を選びたいと思っています。

このプロセスで私が一番大変だと思うことは生徒一人一人が志望校を受けるためにやらなくてはいけない様々な事です。例えば試験がテストの場合、入試試験は各学校ごとにそれぞれ違い、そのテストの出来具合で面接に呼ばれるかどうかという学校があれば、七年生の成績表で選ばれる学校もあります。学科のある学校ではオーディションが心要だったりと様々です。これらの学校を最終的には自分の行きたい順位をつける為に、高校見学をします。実際に自分の目でいんな学校かを見て、通っている生徒や教えている先生の話を聞くのはとても大事なことだと感じました。けれども、学校見学に行く為に現地校に遅刻したり早退しなくてはいけないところが大変です。そうすることによって授業に遅れたりクラスで行われるテストが出来なかったりと

いろいろと不便な事もあります。

高校を選ぶにあたって私が興味のある学校は数学の他に舞台設定などがある事です。なので、それらを両立できる学校を探しています。ある学校には舞台設定が学科としてある高校があります。その学校はオーディションがあり、実際に舞台セットを箱の中に作ります。今年の劇はアーサーミラーのるつぼです現在私はこの台本を読みつつどんな舞台にしようか考えていますが、これがとても難しいです。スペシャライズハイスクールはSSATと言う時間もかかるテストを受けなくてはなりません。問題が百個もあります。私にとって、とても難しいので毎週火曜日に塾に通っています。頑張っている成果が結果に山て希望校に受かればいいなと願っています

この数ヶ月、高校選びをしているとふと私が五年生だった頃を思い出しました。中学校を選ぶ時もこれに似た事をしました。その時は自分が何をしたいのかもわからず、でも同

じように両親と学校見学に行ったの思い出しました。きっとあの頃の経験は今の高校探しの練習だったのかもと感じます。でもそのおかげで私は三年経って自分の目標を見つける事ができました。その事に誇りを持っています。きっとこの経験もいつか未来の自分にとってなくてはならないものになるでしょう。でもその前に早く高校受験が終わる事を願うばかりです。

20×20

初めての解ぼう

W校中等部一年二組
武神　亜弥

私の目の前に、胎児の豚が横たわっていた。青いトレーの上では、うすいピンクの肌が白く見えた。目は閉じていたが、まぶたの奥から私のことを見ているように感じた。外科用メスを持ちながら思った。「血がないことは分かっているけど、先生がちょっとあるかもと言っていたしな。でも、大丈夫。できる。」ふるえる手で、豚のあごの下からさい帯まで切り込みを入れた。私は覚ごをして見たが、ろっ骨におおわれていて中は見えなかった。さらに、ろっ骨の真ん中をメスで切り、両手でろっ骨を割ると、ボキボキという音がして、その後、豚の全ての内臓が現れた。

それから四時間をかけ、私は豚の内臓を一つ一つ切り取り、出した。心臓、じん臓、肺、脳、大腸、小腸を全部。解ぼうを続けているうちに血とその感しょくに慣れていった。

この大きな解ぼうをする前、にわとりの羽、羊の心臓やじん臓も解ぼうした。けれど、今回とは違い、前はパートナーと一緒だった。私の今回のパートナーはベジタリアンで、豚を見たら、かわいそうで気分が悪くなり、できなくなってしまったのだ。だから、私は急きょ自分一人ですることになったのだ。その時は、とても不安で、一人ではできないと思った。けれど、最後には、一人でできてよかったとさえ感じた。

私は、実はキャンプに来る前は、解ぼうは気持ちが悪くて、絶対自分にはできないと思っていた。血がたくさん出て、死体の顔を見られないと思っていた。父の友人の外科医から、子どものころは虫や血は大嫌いだったと聞いたことがあったが、私は、なぜそれでも外科医になれたのかが分からなかった。

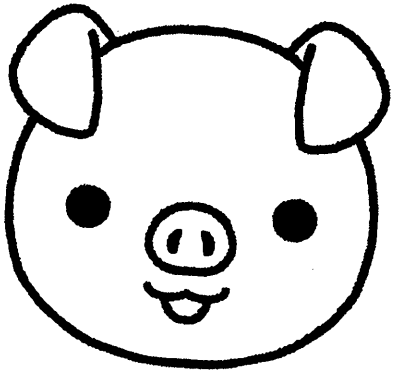
今回、初めて解ぼうをしてみて、なんてなく外科医になった気分で生き物を見ることができた気がする。外科医は、人命の重さを常

に意識しながら、細かい血管や内臓に最大限の注意を払って、難しい手術を行わなければいけない。とても大変な仕事だということを身を持って感じた。しかし、解ぼうを終えて、私は外科医という仕事に興味を持ち始めた自分に気付いた。

今回参加したキャンプは、三週間、大学のキャンパスにとまって、自分が選んだコースを勉強するものだった。コースを選ぶためにテストも受けるので、自分と似たような興味をもった人たちが集まる。授業以外にバレーボールをしたり、みんなでアイスを食べに街に行ったりし、ダンスパーティーもあった。そういう課外活動などを通じて、次第に長い付き合いの友人のように親しくなることができた。解ぼうした時のボキボキという骨の音も忘れないけど、ここで出来た友人のことも忘れないだろう。

来年も、出来ることならキャンプで医学のコースを取って、もっと学びたい。今回は、

生き物全体の体系を学んだが、来年は遺伝学や神経科学を学びたい。九月からの現地校でも、科学の色々な分野に興味をもって、勉強していきたい。



20×20

苦しいことも楽しい

中等部一年一組　柴田紗良

楽しい＝楽で面白い、快適な気分になる。これが「楽しい」の意味だ。そう思っている人がほとんどだと思う。でも、本当に楽しいってそれだけなのだろうか。

私は今年の夏、日本でカヌートリップキャンプに参加した。アメリカでもスキーキャンプに行っていたので、カヌーキャンプも同じようなキャンプだろうと思っていた。けれど初日に言われたリーダーからの一言で私は間違っていたと実感した。

「リーダーは、なにも手伝わないから、子どもだけで全部やりなさい。」

その言葉に嘘はなかった。その日の夜は、リーダー達がご飯を作ってくれたが、次の日からは私達で全部作った。カヌートリップキャンプなので、もちろんカヌーもする。最初の日は練習を

して、次の日から小豆島半周を目指してカヌーを漕いだ。カヌーとカヤックでリーダー達と一緒に漕ぎ続けた。キャンプで全員の荷物を積んで。ところが、途中で水を忘れたことに気付いて、また戻ることになった。

来た同じ道を漕いで引き返していると、もう午後になっていた。海の波も強くなり、風も吹いてきて、漕ぎ続けても進まなくなってしまった。肩も痛くなり、またずれや、脇ずれが痛い。そのため、泣き出す子がたくさんいた。それでも、声を出してイチニ、イチニ、とペースを合わせなければいけない。波で声が聞こえないので、叫ばないとペースが合わない。私が中一で、一番年上だったので、リーダーとして全員を引っ張っていくことになった。だが、どうしても進まない。同じ場所で、二時間半必死で漕いでいた。それでもやっと砂浜に着き、テントを張ると、リーダーから、今日漕いだのがこのキャンプの中で一番短い距離だと聞

き、ショックだった。帰りたいと言い出す子も出てきた。

テントを張るのも子どもだけでやるので、役割を決めて、食事を用意する係りと別れた。リーダーに食材を渡され、四日分の献立を自分たちで決める。火を作るのには、ファイアースターターをこすり合わせる。すると、二時間ほどでつく。その後、料理を作るのだが、時間がかかるので暗くなってしまう。懐中電灯を片手で持って、もう片方で切る。ほとんどの子が手を切ってしまった。その作業をしている間は、今日来ていた水着とラッシュガードとライフジャケット、カヌー用のタイツのままなので、寒くて風邪を引く子もいた。しかも、テントで、濡れてしまったビチョビチョの寝袋で寝なくてはならない。もちろんお風呂は四日間入れない。海水臭くてなかなか寝られない子もいたので、やっと全員が寝られたのは、夜中の十二時だった。朝はまた濡れた水着を着て、冷たい風の中

、火を起こし、ご飯を作る。こうした作業で声をかけるのはほとんど私なので、声が少し枯れてしまった。

こうした日々が四日間続き、最後にはへとへとになっていた。このキャンプは、サバイバルキャンプと言われるものだ。女の子は七人で、男の子は十五人参加していた。全員が協力しなくてはならないので、男女関係なく家族のように仲良くなれた。

色々と大変なキャンプだったが、その四日間の中で学んだことはたくさんある。あきらめないこと、周りのことに気をかけること、そして、「苦しいことも楽しい」ということだ。約六十キロメートルも漕いで、体がしんどくても、それが楽しい、と思えた。周りの友達と一緒に頑張って、最後、ゴールにたどり着いた達成感。顔や体も日に焼けて皮がめくれてきても、風邪を引いても、それを乗り越えて目的を達成できたということが、私にとってはとても楽しくてうれしいことだと思った。

来年は小豆島一周。またその後に得られる達成感やその楽しさを味わいたい。来年もこのキャンプに絶対参加したいと思っている。



勇気を出して

ニューヨーク補習授業校　Ｗ校　六年二組
小高　咲来

私は、今アメリカでの生活がとても充実しています。今年の夏、日本からアメリカへお父さんの仕事の都合で引越してきました。引越してきたばかりの頃は、何もやることがなくてとてもつまらなかったです。日本にいたたくさんの友達ともはなれなくてはならなくてとてもさみしかったです。アメリカへ来てすぐに始まった夏休みは、さみしさやこれからの不安で泣きたくなるような毎日でした。

けれども、学校が始まると楽しいことがたくさん待っていました。それは、新しい友達との出会いです。

初めて新しい学校に登校した日。私は、スクールバスに乗り、知らない人ばかりでした。心臓のどきんどきんと打つ音が聞こえる程、緊張していました。私の周りに座っている人達は楽しそうにおしゃべりをしていて、みん

なには、友達がいるようでした。そこで私はまた、不安になりました。バスが学校に到着して、校舎の入口に向かう所で、一人の日本人の女の子が私に声をかけてくれました。

「向こうに日本人の子がいっぱいいるよ。」

私は、ほんの少しだけほっとして、その子たちの方へ向かいました。行ってみると、学校案内の日に会った、日本人の友達がいました。そこで私はまた安心することができました。

アメリカに来て初めての授業は、テクノロジーでした。教室がどこか分からなかったので、同じクラスの友達に送ってもらいました。先生の言っていることが全く言っていい程、分かりませんでした。一時間目が終わり、ESLの授業では日本人の子に会って、とても安心しました。学校の一日目は分からないことばかりで、大変だったけれど、とても楽しい一日でした。

今、学校で楽しいことはESLの授業です。知らない言葉の意味が分かる事が楽しい

です。一年ぐらいで先生が話していることが分かるようになるといいなと思います。そして、バンドの授業が楽しいです。私は、日本の学校で金管バンドクラブに入っていました。四年生の時からチューバをやっていたので、アメリカでも吹けるとよいなと思っていました。チューバパートは私一人ですが、他のいろいろな楽器の人と一緒に演奏することが楽しいです。今は、十二月にあるコンサートに向けてみんなでがんばって練習しています。日本で教えてもらっていた先生が、私がアメリカへ来たばかりの時に「楽譜は、世界共通。言葉は通じなくても、同じ楽譜から同じ音楽が出てくるよ。」と教えてくださいました。私は、本当にそうだなと実感しました。だから、今までよりももっと音楽が好きになりました。

学校が始まりしばらく経って、体育の授業で同じサックスのチームの女の子と仲良くなれました。その女の子はアメリカ人です。英語

しか分かりません。けれども、私達は、ゴールが入りそうな時や、敵のチームからボールを取ったりした時に一緒に喜びます。その子は、いつも笑顔なので私も楽しい気持ちになります。言葉は、共通でなくても友達になることができました。今は、まだ英語で話しかけられても、私は、理解できないので英語の分かる日本人の友達に訳してもらっています早く私も、英語で友達と話せるようになりたいです。そうしたら、きって、もっと仲良くなれると思います。そして、もっとたくさんの人達と話してみたいと思います。なぜならそれは今、私がアメリカにいるからできる事だからです。

最初は、不安ばかりのアメリカでの生活でしたが、新しい友達との出会いで今は、とても毎日が充実しています。私にとっては、英語で話すことは、ドキドキするし、難しいです。けれど、相手も同じ気持ちかもしれません。だから、私は勇気を出して話しかけたい

と思います。

私は、大人になったら自分の仕事で英語を使えるようになりたいです。せっかくアメリカに来たのだから、そのことを活かせるように学校でもたくさん英語を話すようにしたいです。これからも一歩一歩、勇気を出して前に進めるような毎日を過ごします。

友達

LI校　五年一組
延原　伶

「バーイ」

私は涙をこらえながら皆に大きな声で言いました。この学校に転校してきて、初めて自分から話しかけてできたお友達にです。

二〇十六年六月二十八日は、私が小学校に通う最後の日でした。この日が来るのがとても悲しくて、さびしい気持ちでした。

私は四才でアメリカの小学校に入ったばかりのころは、英語があまり分かっていないなかったせいで、クラスメイトとまったく話をしませんでした。

お昼休みには外に出る規則になっていたので、いつも独りでベンチにあおむけになって、休み時間が終るまでずっと空を見ていました。時々お母さんが学校の外に来てくれてさくごしに話をしていた事もあります。だから、私は休み時間よりも授業時間のほうが好きでし

た。先生が話してくれる事とか、本を読んでくれる事とか、楽しい事がたくさんあったからです。先生が好きだったから英語もだんだん分かるようになって、二年生の時には、G&Tのテストに受かり、学校をかわる事になりました。三年生から新しい学校に行くので、お友達ができるかもしれないと少しうれしくなりました。そして、みんなに話かけられるようになろうと自分に目標を立てました。

だけど、私はその前に一つ頑張らないといけない事がありました。それは目の手術です。私は生まれつき左目があまり見えないので、学校のお休み中に手術をする事になっていました。その手術が終った時、白い目の部分が血でまっ赤になっていました。お医者さんは、「学校に行くまでには白くなりますよ。」と言ってくれたのですが新しい学校に行く日の朝になってもまだ目が赤いままでした。私は、新しいクラスのみんなに、「気持ち悪い」

とか言われないかなって、不安だったけれど

「大丈夫、頑張るぞっ。」

と、心の中で自分におまじないをかけました。

新しい学校の中は、大きな窓から光がいっぱい入ってきていて、キラキラ私に笑いかけてくれている様に見えました。

ランチを食べて、休み時間になった時、私はクラスの女の子達が楽しそうに遊んでいる所に行って、

「一緒に遊んでもいい。」

と、聞いたとたん、

「ノー、目が赤いからイヤ。」

と、気にしていた事を言われたので、頭の中がまっ白になって、ボーッとつっ立っていました。その時、

「ダメだよ、何でそんな事言うの。」

って、一人の女の子が近づいて来て言ってくれました。わーすごくやさしい人だなと思い、私はそのやさしそうな女の子に言いました。

「一緒に遊んでいい」

「いいよ。」

それから、その女の子は私の一番のお友達になりました。そして、たくさんの人とお話ができる様になって、友達がたくさんできました。

私は学校に行くのがとても楽しくなりました。学校がお休みの時は、早く学校に行きたいな、休みなんかなくていいのにって思える様になりました。

私はこの学校に行けて、お友達がたくさんできて本当によかったです。

「私とお友達になってくれてありがとう。これからもよろしくね。」

キャンプでのすばらしい思い出

ニューヨーク補習授業校W校　五年三組
的場　千奈

「わぁー。日本人がたくさんいる。」私は、おどろきときんちょうで少し体がふるえていた。その日は、YMCAのキャンプ初日だった。

私は、今年の夏休みにYMCAのサマーキャンプに参加した。そこで、数えきれないほどの日本人がいることにおどろいた。そして、これからここで新しい友達をつくれると思うと、ドキドキ、ワクワクしてきた。ただ、きんちょうしている面もあった。新しい友達に声をかけられるかわからなかったからだ。不安な面もあった。2週間の長いキャンプに自分がホームシックで悲しくなったり、けがをしたりしないかと思うと、どうにも安心できなかった。

その日の夕方、私達は、オープンゲームナイトをやり、他のグループの子やカウンセラーと仲良くなった。みんなで一緒に遊んだので、いつの間にか仲良くなっていた。

た。最初は不安だった気持ちが、みんなと一緒に遊んでいるうちに、不安ではなく、とても楽しい気持ちになっていた。「これなら2週間楽しめるな」と、思い深いねむりについた。

次の日、アクアティックスが始まった。アクアティックスは、湖の一部を使って泳いだり、遊んだりする活動だ。まず、泳力テストがあった。最初に約25メートルほど泳いだ。途中で足を底についてしまうと、そこでテストは終わってしまう。私は、自分のテストを終わらせたくなかった。なので、がんばって泳いでいたからだ。次のテストは、2分間同じ場所で、水の中で足だけを動かしていて浮いているというテストがあった。このテストに受かったら一番上の級に入ることができる。私は受かった。とてもうれしくてたまら

なかった。泳力テストによってレベルごとに4つの色でわけられた。よく泳げる順に、緑色、むらさき色、青色、黄色だ。泳ぐ時は、テストで受かった色のゴムをうでにつけなければならない。私は、緑色をつけることができたのでうれしかった。泳力テストを受ける前、とてもドキドキしていた。しかし、テスト中は、そんなことも忘れて泳ぐことに集中していた。不安を感じたり、きんちょうしているひまは、なかった。テスト後、つかれて足は棒のようになっていたけれど、良い結果になってほっとした。

キャンプが始まって一週間ほどたった時、私達は、スリープアウトに行った。スリープアウトは、自分達のロッジから30分ほど歩いた森の中、つまり野外で一泊する。私は、キャンプでスリープアウトをするのが一番の楽しみだった。なぜなら、大自然の中で泊まる体験だからだ。夜は、寒くなるのでみんな長ズボンに着がえてから出発した。スリープア

ウトでは、自分達でカレーを作った。カレー作りでは、にんじん、玉ねぎ、じゃがいも、そしてお肉を使った。火は、マッチを使っておこし、木の枝などを使った。前の日に雨がふってぬれている枝が多かったので、かわいた枝を見つけるのが大変だった。グループの子全員で森の中で枝をさがした。火おこしは、カウンセラーがやってくれた。まず、落ち葉にマッチで火をつけた。次に小さな枝から順番に火の中に入れていった。全て枝が火の中に入ったら、カウンセラー達は火をふきはじめた。この仕事は小学生にはやらせてくれなかった。なぜなら、火が子どもの顔にうつると、とてもきけんだからだ。火おこしは、枝集めからはじまり、一度ついたと思った火が消えてしまったりして、私達は、火をつけるのに30分ほどかかった。火おこしは本当に大変な作業だと思った。私は、野菜の担当になった。手を切らないように気をつけながら野菜を切った。ご飯は、飯ごうでたいたので少

しこげがついていてとてもおいしそうにたけた。自分達で作ったカレーは特別においしく感じられた。次の朝、私のグループの子がくまの鳴き声を聞いた。私も最初はびっくりした。しかし、よく考えるとそれはあたり前のことかもしれない。自然がたくさんあれば、くまもいるだろうから。スリープアウトの時は、時間がとても早く感じた。そう感じたのは、友達と楽しくおしゃべりしたり、カレーを作る仕事をしたからだと思う。朝、ロッジにもどる時間になった。一泊だけだったけれど、大自然を満きつすることができて、ぼうけんをしたようだった。

キャンプでは、すばらしい思い出がたくさんできた。その中でも一番の思い出は、友達やカウンセラーとの出会いだ。仲間と一緒にする活動は特別なものだと感じた。この夏の思い出は、いつまでもいつまでも大切にしていきたい。

二二とぼくの最後の日

四年二組　横木結

日曜日の朝、ぼくはテレビを見ていました。すると、お父さんがあわててお母さんを起こしました。「二二が大変だ！」と言いました。ぼくと弟とお母さんが急いでバスルームに行ってみると、二二が床の上でたおれて苦しそうにピクピクとけいれんしていました。お母さんがあわてバッグを用意して、お父さんが家の近くの二十四時間開いている病院へ連れて行きました。

二二は、ものすごくおくびょうな十一才のオス猫です。体は黒と白のもようで、両手は白手ぶくろを着け

ているようです。二二は、いつもお母さんの側にいました。お気に入りの場所はリビングのソファーの上で、ご飯がほしい時は、「ゴハーンといいうちょっと変わった猫です。そしてもう一ぴきの兄弟猫のモモととてもとても仲よしでした。二二は、ぼくがまだ生まれていない時から家にいて、ぼくの兄ちゃんのようなそんざいです。ぼくのお母さんから聞いた話では、お母さんがそうじ機をかける時、赤ちゃんだったぼくをそうじ機から守ろうとして、ぼくの前に立ってそうじ機に向かっていかくしていたそうです。ぼくが大きくなると二二は、ぼくからにげるようになりました。

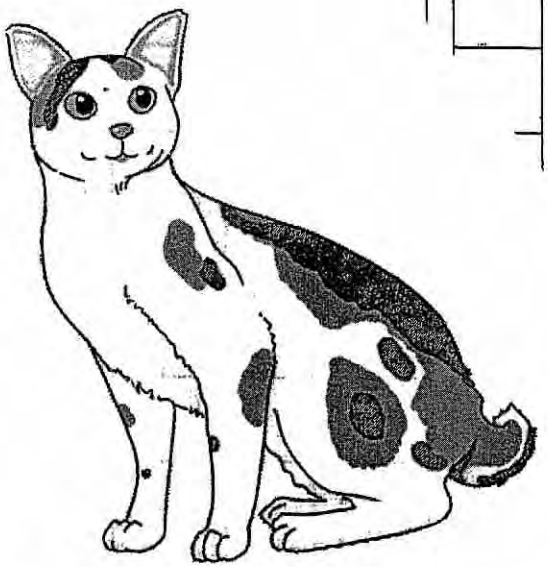
どうしてかというと、ぼくが二二をだっこしたくて追いかけるからです。

二二は、一年前からどんどんやせてきて足が弱くなってしまいました。高い所に上れなくなって、ぼく達に簡単につかまるようになってしまって、ぼくはたいじょうぶかな。と思っていました。そして何回か病院に行きましたが、どこも原因がわからないと言われました。

二二を病院に連れて行ったお父さんから電話がきて、もう助からないから来て。と言いました。そしていかなくたちは、もう二二を苦しませたくなかったので必死に病院へ走りました。やっと病院に着いた時、ぼく

はかなしくて泣いてしまいました。
病院の先生が布に包んだん二二を連れてきてくれて、二二はとても落ち着いていました。先生が注射を二二に打ったからです。みんなで二二をなでながら泣いていました。そしてだきしめたりしていました。ぼくは、「二二とずっといっしょにいたい」。と思いました。だけど、二二にももうそんなに苦しんでほしくないと思いました。みんなで二二に「今までありがとう」。と言いました。そして二二は天国に行ってしまいました。ぼくは、いつもねる前に二二を思い出します。二二が天国でも楽しく遊ん

16×16



でいるときに見つけました。

16×16

お別れの一年

LI校四年　ホースリーそら

2月のある日お友達の家にお姉ちゃんとお泊まりに行きました。そこにお母さんに連れて行ってもらっていた途中でお母さんに日本のおじいちゃんから巨メールが届きました。わたしはお友達と遊ぶのに夢中でお母さんの事に気づきませんでした。

お泊まりが終わって家に帰ってみると、お母さんの顔が赤くて泣いた後が見えました。ドアを開けながら「どうしたの？」と聞きました。お母さんは悲しそうに答えました。

「おじいちゃん、ひいじいちゃんが

亡くなったのよ。」

て、その言葉を聞いてわたしも泣き始めました。そして、お姉ちゃんのところへかけ寄りました。

「るな、知ってたっひいおじちゃん亡くなったの。」

と泣きながら言うて、お姉ちゃんは何も言いませんでした。もう一度同じ事をお姉ちゃんに聞くと、今度は小さな声で

「知ってたよ。」

と、答えました。

「はああああ!!!」

とお姉ちゃんにさけびました。なぜなりなんでもっと早くに教えてくれなかったのかふまんに思ったからで

す。

ひいおじいちゃんは、お母さんのおじいちゃんで99歳でした。わたしが生後5ケ月の時に初めて会いました。でも、あまりに小さかったのでわたしはあまり覚えていません。けれども、家にはひいおじいちゃんとひいおばあちゃんに抱っこされているわたしの写真がいっぱいあります。そして、わたしが初めてハイハイしたひいおじいちゃんが映っています。それには赤ちゃんの頃のわたしと、元気なひいおじいちゃんのすがたが見る事が出来ます。その次に会ったのはわたしが3才の時でした。ひいおじいちゃんが元気がないと連絡を

16×16

もらい急いで日本に帰りました。その時は病院に毎日通い、そのにおいが苦手で早く帰りたいなといつもダダをこねていたとお母さんが教えてくれました。でも、ひいおじいちゃんはどんどん元気になってうれしかったです。

最後にわたしがひいおじいちゃんに会えた時は7歳の時です。ひいおじいちゃんはねたきりになったけどもう入院していなかったのでうれしかったです。でも、動けないすがたを見て悲しくなりました。そのころから、ひいおばあちゃんもちよっと元気がなくなりみんなで心配していました。でも、今年の2月ひいお

ばあちゃんの元気がなくなり、もうすぐで亡くなるかもしれないと日本から連絡がありました。それを聞いたお母さんはまた急いで日本に帰りましたが、その前の日にひいおばあちゃんは息をひきとりました。それを知った私は悲しくして涙がポロリと落ちてきました。2016年はわたしにとってお別れの年でした。だけど、わたしは悲しい気時ちを乗り越えてこれから頑張っていきたいです。

16×16

遠くへ

W校　三年四組　赤松けいすけ

二〇一六年九月二十九日。その日、ぼくは朝からわくわくしました。

「ええ、ルークと遊べるの。」

ぼくは、お母さんに聞きました。ルークは、ぼくのお友だちです。今年げん地校ではじめて一しょのクラスになりました。ぼくと同じくらいのせの高さで、かみの毛がくるくるして、よくおしゃべりする面白い子です。ルークと何して遊ぼうかと考えながら急いで朝食を食べ、おくれないように、バッグを用意しました。

ぼくは、お家をとび出しました。外に出てバスストップまで歩いてい

16×16

ると、ルークを発見しました。
「グッドモーニング。」
ぼくがルークに追いついて、あいさつしたら、スクールバスが到着しました。
教室に着いて、ルークと今日のプレイデートのことを話しました。
「何して遊ぼうか。」
「ゲームしようか。」
「いや、もっと面白いことがしたい。」
「じゃ、たんけんしに行こう。」
「よ。」
ルークとぼくは、口々に話し合いました。ぼくは、学校が終わってから、何をして遊ぶかを考えるのがすきです。色々なことを想ぞうするとわく

わくします。

午後三時になって、チャイムが鳴りました。ぼくは、楽しくなって、ルークとーしょにバスに乗りました。いつもは、五分ぐらいで着くけれど、そのときはとても長く感じました。到着すると、ぼくは、一気に走り出しました。ルークが後からついてきます。

「じゃ、ぼくは、自分のスクーターを持ってくるから、君は、君のを持ってきて。」

ルークが言いました。

「たんけんだ。」

ぼくとルークは、さーいしょ、うら庭から森の中に入って、近くの中学校

へ行きました。グラウンドではサッカーをやっています。しばらく二人で見ていたけれど、もっと遠くにたんけんしたくなって、また走り出しました。

森のおくをどんどん進むと、道ばたに死んだリスを発見しました。

「うう。きたない。」

ぼくが言うと、ルークは、

「きたなくないよ。かわいそう。」

と言いました。でもぼくは、気持ち悪いと思いました。だって血まみれでぐちゃぐちゃだったからです。

さいごにぼくたちは、ぼくが前住んでいた家に立ちよりました。新しい住人がいて、その人がうら庭をき

れいにしていました。

ぐるっと森の中をたんけんして、家に帰るとき、ぼくは、急いで走って転んでしまいました。

「だいじょうぶ。」

「だいじょうぶだよ。」

でも、本当は、ものすごくいたかったです。ルークはやさしいから、ぼくのスクーターを持ってくれました。

ぼくは、またルークと遊びたいです。森の中をスクーターでしょにはしっても、ルークはやさしくして、一しょにゆっくり帰ってくれたからです。

今度は二人で、もっと遠くへたんけんに行こうと思います。

16×16

にわとりの一日

NY W校　三年二組
エルゴリッシュ　里砂

私はにわとりをかい始めて一年半になります。今、うちには四羽のにわとりがいます。今日はにわとりの一日をしょうかいします。

にわとりの朝は早いです。日の出の時間に合わせてにわとり小屋のドアが自動で開くと、にわとりたちは一羽ずつチキンランに出て来ます。チキンランとは、にわとりが遊んだり、運動をしたりする場所のことです。かい始めのころは、うら庭に放しがいにしていましたが、タカにおそわれそうになってからは、お父さ

んがチキンランを作りました。チキンラはたて三メートル、横四メートル・高さ二メートルほどの屋根のついた小屋の様な物です。中にはにわとりが上がれる止まり木や、砂あびのできる砂場があります。チキンランに出て来たにわとりは、水をのみ、えさを食べます。えさはとうもろこしや大麦などのこく物です。それから、消化を助けるためのくだいた力キの貝も食べます。

朝七時半になると、にわとりをチキンランから庭に出します。庭に出たにわとりは虫をつかまえて食べたり、庭に生えている草を食べたりします。それから、とうだりもします。

にわとりは助走をすると、三メートルから五メートル位とべます。

昼になると、にわとりをチキンラーンにもどします。チキンラーンの中で、にわとりは止まり木に上り、羽づくろいをしたり、砂場で砂あびなどをしています。そしてたまごを生みます。たまごを生むのは鳥小屋の中の巣箱の中です。巣箱は全部で四つありますが、にわとりは、そのうちの二つしか使いません。そしていつも巣箱の取り合いをしています。巣箱のそこには、ワラがしいてあります。にわとりの生んだたまごがわれないようにです。

私が学校から帰って来ると、にわ

16×16

とりはとてもよろこびます。私がにわとりをまた庭に出してあげるからです。私はにわとりが大好きなので、いつもいっしょに遊んだり、だっこしてあげたりします。私がなでてあげると、にわとりは気持ち良さそうにして、野さい畑からトマトを取って来てあげると、もっとよろこびます。

夕方になると、にわとりをまた牛キンランに入れます。あたりが暗くなり始める前にさい後のえさを食べ、水をのみます。そしてにわとりは自分たちで小屋に入って行きます。日がくれてから二時間位で小屋のドアは自動で閉まります。

16×16

夜には、ためきやスカンクなどが来てあぶないからです。小屋の中には、にわとりがねむるための止まり木があります。夜になると四羽とも上まり木の上にしゃがんでねます。

これがにわとりの一日です。

おやすみなさい、にわとりさん。

明日もまた楽しい一日が始まります。

アメリカと仲よくなりたい

W校　三年二組
福富　こはる

どの国の人も、かなしい時にはなき、楽しい時には笑うんだ。

これから、わたしの新しい家、アメリカに来て思った事をたく山思い出して書いてみようと思います。わたしがはじめてアメリカに来た時に思った事は、アメリカと日本は全くちがうんだなぁという事です。

一つ目は、子ども一人で外出できないという事です。わたしは日本で電車とバスで通学していたので、母からこの事を聞きとび上がるほどびっくりしました。そのわけを母に聞

いたら

「子どもは、自分の身は自分でまもれないからだよ」。

と言っていました。

二つ目は車で出かけた時に気がつきました。それは、日本では信号は横向きなのに、ここではたてにぶら下がっている事です。わたしは父と母に

「信号がたてにぶら下がっているよ。

と言ったら

「ほんとだ。よく気がついたね」。

と母が言いました。父は

「ここは地しんはないんだよ」。

と言っていました。わたしはまたびっ

っくりしました。

三つ目は、家ぞくでマンハッタンに電車で出かけた時に気がつきました。あまりにもおどろいてわたしは後ろにひっくり返りそうになりました。何におどろいたのかというと、駅にかいさつがないという事です。わたしは、かいさつがないならお金をはらわずにのれてしまうのではと思いました。けれど父の話では切ぷがいるとの事だったので、わたしの頭の中はハテナでいっぱいでした。電車にのってしばらくすると、車しょうさんが切ぷをかくにんしに来ました。わたしは、だからかいさつはいらないんだと分かり、頭の中のハ

テナが全部消えてすっきりしました。
それと同時にアメリカは日本よりも大ざっぱなんだなぁと思いました。
わたしは母に
「アメリカの電車って新かん線にに
ているね」。
と笑いながら言いました。母も
「変な所がにているよね」。
と笑っていました。
来たばかりのころは、日本とアメリカのちがう所に目が行っていたけれど、アメリカに来て二ヶ月がたち学校に通うようになった今は、日本とアメリカのにている所にも気がつくようになりました。それはたとえば、みんな元気にあいさつをする事、

16×16

みんなのチームワークがいい事、たく山笑って、たく山なく事などです。もしかしたらわたしの見方が少し変わって来たのかも知れないなぁとも思います。

わたしはさい近よく思います。アメリカのいい所や、やり方をもっともっとたく山知りたいと。

わたしとピアノ

W校三年一組
伊東歩

わたしは今、ピアノを習っています。今までにやった習い事の、スイミング、ジムナスティック、バレエ、サッカーの中で、ピアノが一番好きで、一番がんばっています。

わたしがピアノを始めたのは、日本でようち園に通っていた時です。ピアノを始めたいと思ったきっかけは、毎日お友だちからピアノをやっていてすごく楽しいと聞いていたからです。けれど、アメリカに来て二年間はピアノを習えませんでした。それが今年からできるようになった。た

のでとてもうれしいです。ようち園の時からピアノが好きでしたが、今アメリカでは家にピアノがあるので、今の方がもっと練習ができて、楽しいです。

わたしはいつも楽ふをもらう時、さいしょは、「一生できない」と思うくらいむずかしく見えます。練習を始めると、できない事がたくさんあります。たとえば、はやく指を動かしてしまったり、音ぷをはやく読めなかったり、どの指でひいたらいいかがわからなかったり、長い曲だったら次に楽ふでどこにいけばいいかが分からなくなったりします。しかし、毎日毎日くり返し練習したり、

16×16

お母さんに手伝ってもらったり、どこを強くひくのかや、どのくらいはやくするのかや、どの指でひいたらいいかを書いた先生のメモを読みながらひきます。そうすると、一週間くらいでできるようになりさいしょむずかしく見えた楽ふもかんたんに見えてきます。

練習している時、きれいな音を見つけるのが大好きです。わたしがきれいだと思う音のれいは、ドミソ、レファラ、ミソシ、ファラドです。ほかには、右手でソファミレドをひいた後、左手でつづけて一つひくいソファミレドをひくのがもっときれいだと思います。

家で練習するだけではなく、先生の家でもレッスンをうけます。先生の家に行く時にわたしは、「家で練習した曲がちゃんとできるかな」とふ安になったり、先生にひけることを見せたくてわくわくします。先生とレッスンしていると、すぐ教えてくれます。やさしく教えてくれるので、先生が好きです。

わたしは先生の家で開かれたピアノの発表会に一回だけ出ました。ひいた曲は「よろこびの歌」と「モーニングムード」の二曲です。さいしょは「いつ自分の番が来るのかな」とわくわくしましたが、やっと自分の番になると、間ちがえないか、ど

んどん心配になってしまいました。
でもわたしは、あの二曲を練習したことを思い出して、がんばって間ちがえないようにひきました。ひき終ったら、回りの人たちからはく手をもらいました。わたしは間ちがえないでできたのでほっとしました。その後、わたしはほかの子のえんそうも聞きました。わたしは「こんなにわたしがしらない曲があるんだな、わたしもあんな風にひけるようになりたいな」と思いました。

わたしはピアノのもっとむずかしい曲を上手にひけるようになりたいです。そして、いつかわたしは自分で曲を作ってみたいと思います。

ぶんちきのうた

L一本交二年一組
マメさら

わたしは六才の時、ママのぶんちきのうたを作りました。ママがおこったうた時、わたしがぶんちきのうたをうたうと、ママはかならずわらうからおこられないのです。ぶんちきのうたは、こういううたです。

ごんちきのうた											
ごんちきのうた		マ	ソ	ね	レ			ち	ふ		
ごんちきのうた		マ	ー		ぶ	マ		ぢ	ん	マ	
ごんちきのうた		マ		ぶ	ー	マ		よ	ち	マ	
ごんちきのうた		の	レ	ん	ぶ	は		ぢ	ぢ	の	
ごんちきのうた		ぶ	デ	ち	ー					ぶ	
ごんちきのうた		ん	ィ	ぢ	ぶ	い		マ	る	ん	
ごんちきのうた		ち	ー	ぢ	ー	つ		マ	ん	ち	
ごんちきのうた		ぢ	ゴ	ぢ		も		の	ち	ぢ	
ごんちきのうた			ー	ぢ	言			ぶ	ぢ		
ごんちきのうた		マ		ワ	う	ぶ		ん		マ	
ごんちきのうた		マ		ン	か	ー		ち	ぶ	マ	
ごんちきのうた		の			ら	ぶ		ぢ	ん	の	

12×12

ぶんちぎのいみは、すごくずこる人といういみです。ぶんちきの言ばはわたしが作りました。るんちきとふんちぎの言ばもわたしが作りました。るんちぎとふんちぎも、ぶんちぎと同じいみです。ママは、どうしてわたしがぶんちぎのうたをうたうとわらうのかな？ママに聞いてみたら、ママは

12×12

こう言いました。

「おもしろくてかわいすぎて、ついおこることをわすれるのよ」

と。わたしはこのぶんちょのうたを作って、ラッキーだと思いました。

ポーリーとにわとり

W校二年四組

板野楓

ずっとむがほしかったのでサンタさんにおねがいすることにしました。でもマガシェルターから犬をもらってきました。名前はポーリー。うちにはネコとにわとりとトカゲと魚がいますだからポーリーのおせわは、わたしのしごとになな

りました。うれしかったです。

でもある日ポーリーがにわとりをかみました。ママがにわとりをたすけようとしました。わたしはポーリーにハムをなげました。でもポーリーはにわとりをはなしませんでした。にわとりがしんだと思って、みんな泣きました。

「ポーリーはわるい子！」

と何回も言ってしまいました。

にわとりは大けがをしました。わたしはかなしくて、そしてこわかったです。でもママが教えてくれました。

ポーリーは「リョウ犬」のしゅるいで、小さなどうぶつをとることをしごとだと思っているのです。だからポーリーはわるい子ではありません。

どうぶつをかっていても、そのどうぶつのことで知らないことがたくさんあります。わたしはこれからもいろいろなどうぶつのことをよく知ってもし何かあったら時にあまりびっくりしないようにしたいです。

大切な時間

W校　二年三組

青木　菜々美

わたしは、おかあさんと二人ですごす時間がすきです。

朝、妹たちがねている間、おかあさんといっしょにごはんを食べます。十五分ぐらいしかないので、あんまりお話ができないけど、ホットした気もちになりま す。わたしは、妹よりも早

く学校から帰ってくるので、
おかあさんといっしょにお
やつを食べます。四十分の
間だけ※、まだ帰ってこ
なくていいのにと思う時が
あります。妹がえい会話の
レッスンをしている間、お
かあさんといっしょにおに
わであそびます。おにごっ
こをしたり、はしるきょう
そうをしたりします。わた
しは、はしるきょうそうが、

12×12

一ばんすきです。

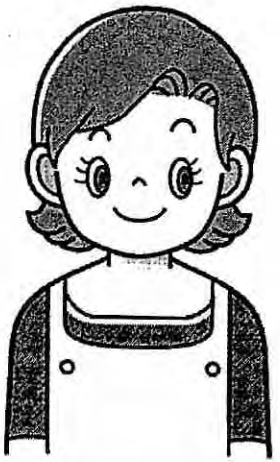
かあさんと二人でおふろに入ります。妹が先におふろからでて出たり、なかなか入らなくておかあさんと二人だけになった時は、

「やった！」

と思います。むかし妹が赤ちゃんだったころよる、おかあさんが妹を先にねかしつけてから、わたしは、おかあさんと二人で、こうさ

くをしたり、ぬり絵をしてがらねました。とってもえていました。またそういうことをしたいけど、もう妹は、大きくなったので、ほとんどできません。でもこの間、ねているわたしをおこして、「ななちゃんおり紙やろう」ぷと言いました。わたしは、

ねむたかったけど、
がっかりした。
たので、おきました。
これがわたしの大切な時間
です。



12×12

W校うんどう会

W校 二年三組
担任 見徳

今日は、W校のうんどう会。きょ年ぼくは、リレーのせん手だった。ぼくは、今年もリレーのせん手になりたかった。ざんねんなが らほけつだった。

だからときょうま でがんばろうと思った。スタート のしきは二番、そこからが

んばって一番になった。一番のシールをもらってうれしかった。

ぼくたちの学校は、四年れんでく赤組がかっている。でもとちゅうのポイントでまけていた。だから今年はむりだと思っていた。のこすはラストぜんいんでぼうえんをポイントが高いリレー。クラスぜんいんでぼうえんをした。まず一年、二年、三年は、かっていた。でも、

四年、五年、六年は、ぬかれてしまった。赤組がかてるとはわからなかった。

いよいよさいしゅうはっぴょう。校長先生からのことばは、

「赤、紅のうしょうです。」

まさかがてるとは思わなかった。みんなびっくりした。

ぼくもびっくりした。ほんとうにうれしかった。これで五年れんでん赤組のかち

だ。

来年も、ぼくのいる組が勝てるといいな。そしてぼくは、リレーのせんしゅになれるようにがんばるぞ。



12×12

①

イーパとぼくとセミ

W校　二年二組

ウォーカールークかずき

「ジ、ジジイー、ジー。

セミの声が聞こえる木に、

ゆっくり、そうっと、よって行って、セミをさがします。

ぼくが、近くに行くと、セミはなくのをやめて、公園がしずかになります。しずかになった時、ぼくはもう、見つけていました。

「イーパ、セミがいたよ」。
と、小さな声でおじいちゃんをよびました。イーパがそっとあみをかまえて、右から左にサッとふりました。
「ジャッ」。
あみの中で、セミがうるさくないて、バタバタと羽をうごかしています。
「やったー！」
ぼくとイーパは、あみからセミを出して、虫かごに入

③

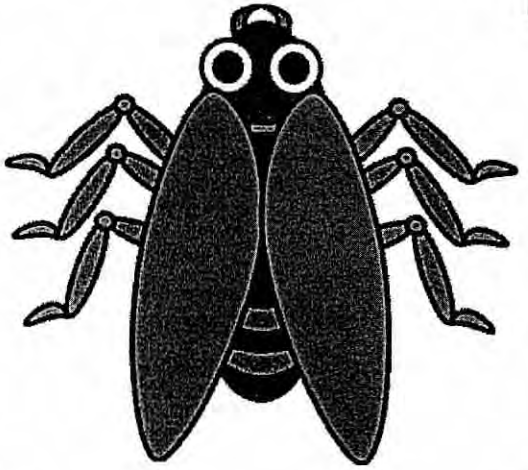
れました。かごの中でないて、とび回って、大きさわざして、やっとしずかになりました。つぎのセミをつかまえて、かごに入れたら、さっきより大きさわぎになりました。

おうちにもって帰って、図かんと本ものセミをくらべました。同じ色と形だけど、ぼくのは生きて、うごいています。体をもった

④

ら、ブルブルします。イー
パが、二ひきのセミをもっ
て、どっちがオスでメスか、
せつめいしてくれました。
オスには、おなかに音を出
すところがあって、メスに
は、おしりにたまごを生む
ところがあります。かんさ
つした後、おにわに出て、
一ぴきずつにがしました。
ぼくは、夏休みに、たく
さんの虫をつかまえて、見

⑤



て、しらべて、絵をかいて、にがしました。日本は、いっぱい虫がいて、たのしいです。

12×12

こう白たいこうリレー

W校二年一組
中村結

わたしのむねがどきどきしました。鳥はだが立つぐらいどきどきしました。リレーがはじまります。一くつがぬげないかな。バトンをおとさないかな。バトンをうまくもらえるかな。なぜかというと、れんしゅうの時よくバトンのうけわ

たしのところでおそくな
ていたからです。そんなこ
とを考えていたら、もう一
年生の男の子たちが走っ
きています。わたしは、
「ピンク。ピンク。ピンク。」
とチームの男の子になん回
もさけびました。でも男の
子は、まず青チームの子に、
そして白、それから水色の
子にわたそうとして、その
あとや、とわたしにバトン

③

をわたしてくれました。

「なんでそんなことに。」

と思ったけど、バトンをにぎってはしり出しました。

近くに赤の子がいたから、

「その子をまずぬかそう。」

と思ってぜんりょくで走りました。

た。でもぬかせたと思った時はもうバトンをわたさないといけない場しょだったのです。だからわたしは、バックスくんにバトンをわ

④

たしました。

「ノックスくん、ピンクチームのためにぜんりょくで走って。

と思いながら。そのあとは、ピンクのためにおうえんしました。リレーがおわったころには、のどがいたくなって声もがらがらでした。

れんしゅうの時みたいにぬかしたりでそなくてすごくくやしかったです。でもじ

⑤

分なりにちゃんとがんばったと思います。みんながんばったからピンクチームは、上の方のじゅんいになれてよかったです。

おわり

12×12

七ばんでん車

L工校　一年一くみ

ふくもと　じゅんのすけ

ぼくは、七ばんでんしゃがすきです。七ばんのでんしゃは、とてもかっこいいです。四ばんや五ばんのでんしゃもすきだけど、七ばんのでんしゃにはまけます。よく見ると、ちょっとちがいます。ナンバーがむらさきいろのところもかっこい

いです。はしるところもいいです。

ぼくは、がっこうにいくとき、七ばんのでんしゃにのります。まん中の大きなまどのところにすわって、そとを見ます。テニスのしあいをするところや、やきゅうをするところが見えます。でんしゃがいっぱい、五十車りょうぐらいとまっているところも見えます。

ときどき、ひこうきがとんでくるのも見えます。こうえんのそらで見るひこうきよりも、ずっと大きく見えます。ぼくは、七ばんのでんしゃにのって見るけしきがすきなので、七ばんのでんしゃがいちばんすきです。

けんちゃん

けんちゃんだいすき

一ねんニくみ

はりまみゆ

わたしのおばあちゃんは、

けんちゃんといっしょにぬをかっています。

ちいさくてしろとくろとちゃいろのいろのいぬでした。

わたしがうまれるまえからおばあちゃんのいえにいて、わたしは大すきでした。

けんちゃんはこんどの二がつにしんでしまった。

いました。十七さいでした。

そのときわたしは一じきこくごにほんにいたけど、わたしがでかけているあいだにしんでしまいました。

ほんとうはけんちゃんがしぬときはいっしょにいたかったです。おばあちゃんのいえにかえってけんちゃんがしんじゃったときいてとてもかなしかったです。

でももしがしたらけんちゃ

んは、わたしががなしくな
いようにびっくりさせな
いように、わたしがいない
あいだにしんだのがもしれ
ません。それにけんちゃん
はず、とじあいがわるかっ
たのに、わたしが一じきこ
くでにほんにがえるのをま
っていてくれたのがもしれ
ないなとおもいます。
けんちゃんはきっといま
てんごくにいて、わたしの

12×12

ことをじっと見ているとおもいます。だがらわたしはけんちゃんにわらわれないようにまいにちがんばろうとおもいます。

にほんの小がっこう

1Eこう一ねんニくみ
市川芽菊

わたしのがぞくはなつやすみに、ひこうきでにほんにいきました。わたしとおねえちゃんはしずおかの小がっこうにいきました。

一ねんニくみのせいとはおもしろいともだちがいっぱいいました。

しょうまくんといつもあ

さ、あさがおをいっしょにみました。あさがおのいろは、むらさきとピンクでした。わたしもあさがおがほしいとおもいました。

となりにすわっていたのはあらたくんです。あらたくんはあたまがいい子です。そうじのしかたをおしえてくれたり、たなばたのおりがみをおしえてくれました。わたしはうれしかったです。

りゅうくんはスペインごをわたしとしゃべりました。りゅうくんはうれしかったとおもいます。どうしてかというと、スペインごをしゃべるともだちがほしかったからです。

さいごの日にりゅうくんがすこしなきました。もうわたしにあえないから、かなしかったのだとおもいます。わたしもかなしかった

です。

きいごにみんなとあくしゅをして、てがあかくなりました。

大きくなったらまたあえるかなとおもいました。

大すきなりんご

W校一ねんーくみ

おか田えま

あきになったので、かぞくでりんごがりにいきました。

車で一じかんぐらいいくとやさいとくだものははたけがたくさんあるところにつきました。

わたしは、りんごがりをたのしみにしていたけれど

まえの日に、右下のはがぬけたので、すこしふあんでした。わたしのまえばは、二本とも、まだはえてきませんでした。かたいものや大きいものがたべられません。それでも、とりたてのぶどうやメゃベツをたべているうちに、たのしくなっていきました。

そして、いよいよりんごばたけにさました。わたし

12×12

は、おとうさんにかた車をしてもらい、たかいところにあるりんごをとってたべました。あまずっぱくておいしいりんごでした。

たいごは、ハニークリスプのところにきました。わたしは、あかくて大きなりんごをさがしました。そしてーばんおいしそうなりんごをみつけました。

「いいのみつけた！」

りんごをとって、

「がぶり。」

「ぽろり。」

とかじりました。

左下のはがぬけました。

口の中があじになりました。

こんどから、りんごは、小さくきってたべようとおもいました。